

第 206 回新潟循環器談話会例会

日 時 平成 8 年 2 月 24 日 (土)
午後 3 時より
会 場 メルパルク新潟郵便貯金会館

I. 一 般 演 題

- 1) 難治性発作性心房粗動に塩酸ベプリジルが有効であった 2 症例

阿部	晃	相沢	義房
庭野	慎一	池主	雅臣
大平	晃司	柴	正美
藤田	聡		

(新潟大学第一内科)

ベプリジルは Ca および Na チャネル阻害作用を有する薬剤であり、Kチャネル抑制作用も有することが示唆されている。今回我々は種々の薬剤にてもコントロール困難な発作性心房粗動に対してベプリジルが有効であった 2 症例を経験したので報告する。症例 1 は 53 歳男性。肥大型心筋症で、発作性心房粗動のため 92 年より当科通院中。心房粗動時心電図では数種類の P 波形が認められ、2 : 1 ~ 6 : 1 房室伝導を示していた。EPS で心房粗動は誘発されなかったが、発作時 EPS では周期長 275 ms, Common Type の心房粗動であった。右心房後中隔で Double Potential が記録され、下部心房で RF を行ったが、不成功であった。キニジン、ジソピラミド、プロカインアミド、ピルジカイニド、アスペノン、フレカイニド、アミオダロン、ソタロールでの予防は困難であり、95 年 3 月 9 日ベプリジル 300 mg 内服単独投与開始した。症例 2 は 35 歳男性。単心室の診断で当院第二外科通院。19 歳時より発作性心房粗細動が出現、His 束近傍での単一刺激 (400/250) で周期長 250 ms, Uncommon Type の心房粗動が誘発された。最早期興奮部位は房室結節近傍であるため RF は施行できなかった。キニジン、ジソピラミド、プロカインアミド、ピルジカイニド、アミオダロンでの予防は困難であるため、95 年 2 月 16 日ベプリジル 300 mg 内服単独投与開始した。内服開始以降約 1 年間心房粗細動にて来院した回数は、開始前の同一期間と比べ症例 1 で 4 回 vs 16 回、症例 2 で 9 回 vs 19 回と著しく減少した。2 症例とも副作用は認めなかった。基礎心疾患に伴う難治性心房粗動にたいしベプリジルが有効であることが示唆された。

- 2) 急性心筋梗塞の血栓溶解療法に伴う出血事故について

政二 文明・畠野 達郎 (桑名病院循環器科)

【目的】急性心筋梗塞の血栓溶解療法に伴って重大な出血事故を起こした患者の特徴を心室穿孔症例を中心に明らかにする。【対象】平成元年 5 月より平成 8 年 1 月の間に急性心筋梗塞の急性期に血栓溶解療法を行った 98 例。【結果】施行後 6 時間以内に重篤な事故を見たのは 9 例で全例女性であった (縦隔血腫 1 例、脳出血 1 例、心室穿孔 7 例)。心室穿孔は自由壁 5 例、心室中隔 2 例であった。このうち 5 例で、12 時間以上前に長時間持続する強い胸痛発作があり、いったん軽減したのち胸痛の再発をみるまでの間活動していた。4 例は歩行して受診した。中隔穿孔 1 例を含む 5 例で ST 上昇をみた誘導は、II, III aVF であった。穿孔例の血栓溶解療法の内容は、UK の i.c. のみ 1 例。tPA の d.i. のみ 3 例、tPA の d.i. と pro UK の i.c. 併用 3 例で、tPA の使用開始後に多い印象があった。心筋逸脱酵素値、白血球数、当該発作発症から投与までの経過時間には差はないと思われた。

- 3) 新発田・中条地区の急性心筋梗塞の罹患率

熊倉	真	(新発田・中条地区心臓救急 研究班 県立新発田病院循環器内科)
鈴木	薫	
田辺	恭彦	
田辺	靖貴	

目的：当地域の AMI の発生要因の検討、実態の把握及び対策の評価の基本資料とする。

対象：新発田圏の全住民 153,518 人調査期間は 1995. 1. 1~12. 31

方法：1) データ収集は開業医・病院医師からの発生報告、死亡小票の閲覧、消防署からの発生報告、病院のカルテの閲覧および詳細不明患者に対する主治医へのアンケート調査 2) 診断基準は日本モニカ研究班の 1986 年第 3 次改訂基準に従った。

結果：1) 登録数 AMI 129 人 (初 121, 再 7, 不明 1) このうちモニカ基準で判定できたもの 110 人 (診断確定 70 人, 可能性あり 39 人その他 1) 残り 19 人は調査中 SD は 49 人 2) AMI 罹患率 AMI 確実例; 対象を 25~64 歳とした場合男 0.455, 女 0.174, 全体 0.313 千人対、対象を 25~74 才とするとそれぞれ 0.724, 0.320, 0.516 AMI 確実例 + 可能性例では 25~64 歳全体で 0.401, 25~74 才で 0.574 といずれも高率であった。